

るので、洪水の様態は既述したが、その降雨量がどのように洪水になっていったかの、水位計測の資料を若干述べて、洪水になってゆく様子を計数的にも検討しておこうと思う。

八月二十五日から降りをはじめ、田島で二三ミリ、南郷で〇・六ミリ、高田で〇・四ミリで、会津盆地の他地方には降っていない。翌二十六日には田島で八八・六ミリ、南郷で三五・〇ミリ、高田で四六・〇ミリ、若松で四九・〇ミリなど、猪苗代湖南岸の福良では一二六・三ミリにも達したが、盆地の方の量はあまり大でなかった。翌二十七日が本格的な降りで、田島では一三六・〇ミリ、三日間の連続雨量は二二六・〇ミリにも達した。昭和十六年七月二十一、二の連続雨量二五八・五ミリよりは低く、若松でも二十七日の一三二・〇ミリを加えて一七一・〇ミリに達したが、昭和三十一年七月十五、六の連続雨量は一八四・二ミリにも達したことがあるから、この程度で洪水になる様態を知っておく必要がある。二十七日の高田の雨量は九二・九ミリで、三日間で一三九・三ミリに達し、これも昭和三十一年の三一九・七ミリには遙かに及ばなかったわけである。

しかし大正二年の場合は、阿賀川の本、支流の水位は異常に高められた。山科量水標では一七五・四メートル、旧量水標の標高は一六五・九〇メートルであったから、それより九、五七七メートルも高く、新量水標一六五・一五メートルよりは一〇・三三メートルも水位を増している。これはその後の最高昭和十六年七月二十三日の七・五四メートルよりも二・七九メートル高いが、この際の田島の連続雨量は二五八・五ミリで、これは、泡の巻以下の捷水路開さくによる一・一三八〜一・一七九メートルの河底低下を計算に入れると、これを差引き一・六一メートルとなり、理解される。これだけの改修効果はあったことになる。

宮古橋量水標は一八三・二六メートルで、〇点が一七七・五四メートルであるから五・七二メートルの増水とということになる。宮古のその後の最高水位は、やはり昭和十六年の四・九〇メートルであるから、それよりも〇